

沖島南の資源保護活動水域におけるシジミ生息密度の増加

井戸本純一

1. 目的

琵琶湖最大のシジミ漁場であり、新たな資源保護の取り組みがなされている沖島南の水域における資源の動向を調査する。

2. 方法

例年禁漁期に実施している北湖一円漁場の資源概況調査（別頁参照）と併せて、2020年から新たに12の定点（図1）を設け、資源の実態とその変化を実際の漁船漁具を用いてより詳細に調査した。

3. 結果

面積当たりの漁獲数と殻長組成から殻長別の生息密度を推定した。成貝の密度について12定点を南北3つに分けて平均し、北湖の主要7漁場（沖島周辺の3漁場を含む）の平均とともに図2に示した。密度はいずれも2020年から2021年にかけて減少し、2022年には増加したが、保護区域を含む南4定点の平均はほかより減少が小さく、増加は大きかった。

2022年の12定点における各地点の殻長別推定密度を図3に示した。増加が大きかった南4定点のなかでは、保護区域のある東ほど多い傾向がみられ、とくに漁獲サイズ未満の小型貝が多かった。保護区域内では湖底耕う

んやヒメタニシの駆除活動のほか、一部で親貝や稚貝の放流が実施されており、それらの効果が現れた可能性がある。



図1 沖島周辺漁場におけるシジミ資源調査（貝桁網）定点

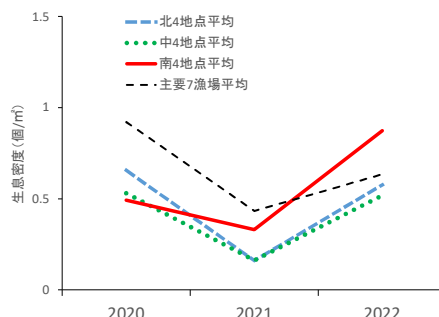


図2 沖島南の12定点および北湖の主要7漁場における成貝（殻長14mm以上）の生息密度の推移

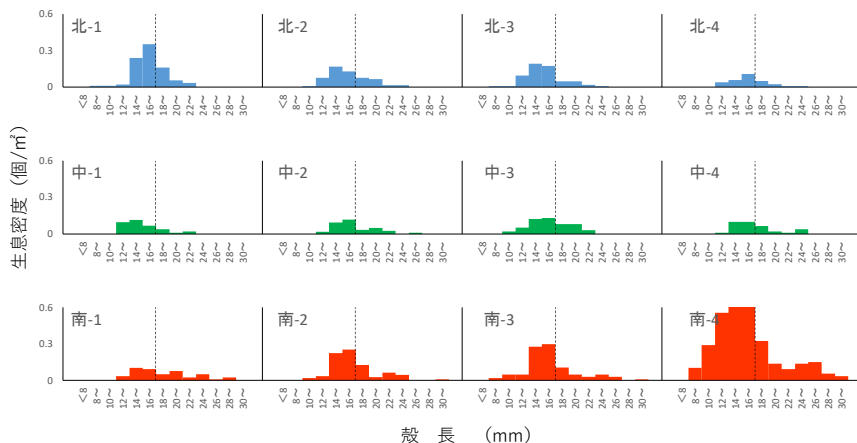


図3

2022年の沖島南12定点における漁獲貝（選別前）の密度と殻長組成（点線は漁獲制限殻長18mm）